

書評 Peter Brown, *Authority and the Sacred*:

Aspects of the Christianization of the Roman Empire,
Cambridge, Cambridge University Press, 1995.

足 立 広 明

ローマ帝国のキリスト教化については数多くの本が出版されている。しかし、その多くはイエスの行跡をたどったあと、使徒の伝道とそれに続く迫害と殉教の歴史を中心にして、コンスタンティヌス帝によるキリスト教公認で筆を終えるものが大半ではないだろうか。三二三年のミラノ勅令による公認のあとは、帝国のキリスト教化はすでに既定のものであるかのように簡単に触れられるのみで終わることが通例である。しかし、コンスタンティヌス以後においてもキリスト教化はスムーズに進展したわけではなかったし、「勝利」を手にしたからのキリスト教側からの対「異」教迫害の問題も大きい。ここで紹介する本書は、こ

のコンスタンティヌス以後の古代末期におけるローマ帝国のキリスト教化の諸相を描写し、近代西洋の基礎となったキリスト教がいかに成立したかを展望しようとするものである。

コンスタンティヌス以後の地中海世界を展望すると、そこにはアラブ人が侵入する直前の六世紀になっても「異」教の伝統が根強く残っていたことに気づかされる。後のエジプトのコプト正統教会などの原型となった単性論派教会きつての論客、アンティオキアのセウエロスは青年時代まで「異」教徒であり、彼の鋭い神学思考は古典修辞学の修練によって鍛えられたものである。後の西方カトリック教

会の礎を築いたとされるアウグスティヌスにしても、キリスト教に転じるのはその人生も半ばのことで、それまでの懊悩の中で迷った青春時代を『告白』にまとめている。彼もまた「異」教の古典で修練を積み、マニ教へ入信していた時代もあったのはあまりにも有名な事実であろう。

一方、この時代は、キリスト教が迫害される立場から迫害する側に転じた時代でもあった。四世紀末のアンティオキアの非キリスト教徒修辭家リバニオスは、「象よりも貪欲」で青白い顔をした黒衣の修道士たちが、「法律に違反して」神殿を次々に破壊する暴挙を皇帝に訴え出ている。三九二年のエジプトにおけるセラピス神殿の破壊や、同じくエジプトで四一二年、女性の新プラトン哲学者のヒュパティアが虐殺されたのは、このような修道士によってであった。ユダヤ人シナゴグの焼き討ちなど、キリスト教世界における最初の反ユダヤ主義の高まりもこの時代に始まっている。サマリア人への差別は彼らを反乱へと追い込む結果を招いたし、その結果は無慈悲な軍事的鎮圧であった。また、同性愛が神の定めた自然の秩序に反するという理由で、激しい非難の対象となるのもこの時代である。キリスト教の他者への不寛容さは、十字軍、異端審問、植民地時代の強

制改宗などでつとに有名であるが、古代末期の「勝利」の時代において、その本質はすではつきりと現れていたのである。いったい、コンスタンティヌス以後のキリスト教と非キリスト教の関係の実態は、どのようなものであったのだろうか。

筆者のPeter Brown（以下ブラウン）は、これまでもローマ帝国のキリスト教化を中心課題としながら、古代末期の地中海世界の文化的変容の問題について数多くの著書、論文を著してきたパイオニア的研究者であり、今日の古代末期研究の隆盛を導いた功績はだれしも異存のないところであろう。オクスフォード大学出身の気鋭研究者としてAugustine of Hippo: A Biography (Berkeley, 1967)でその地位を確立したのち、米国のカリフォルニア大学バークレー校に移って、キリスト教初期修道聖人の伝記を文化人類学的な視点から再読し、古代末期の心性の歴史を書き改める論文、著書を連作した¹。さらにプリンストン大学に移って、一九八八年に大著 *The Body and Society: Men, Women, and Sexual Renunciation in Early Christianity* (NY)を上梓し、性に関するキリスト教的規範の誕生と禁欲主義との関係について網羅的に調査している。

本書はこのようなブラウンの一九九三年のケンブリッジ大学・クレアホールにおける三回の講演をまとめたもので、公認以後のローマ帝国のキリスト教化の問題について、これまでの教会教父や帝国法令中心の二元的な解釈を批判し、目を日常生活に転じ、多文化の並存する状況のなかでキリスト教化の問題を捉えなおそうとするものである。

まず、第一章 *Christianisation: Narratives and Processes* では、古代末期においては、基本的に「異」教とキリスト教の平和共存が常態であり、キリスト教も日常レベルの祭日などでは「異」教化していたことを確認する。その上で、アウグスティヌスごろから近代の西洋人と共通する、大変不寛容なキリスト教理解が成長してくる過程が明らかにされる。

第一章の冒頭では、四世紀のブリテン島でアンニアヌスという男が彼の財布を盗んだ者に対して、その者が「異教徒であれ、キリスト教徒であれ」呪われるよう、泉の女神スリス・アルテミスに祈った碑文が引用される(100)。ブラウンはそこに公式見解的な教会史観と異なつて、多文化の並存する古代末期の社会実態を読み取るうとするのである。

彼は「異」教徒とキリスト教徒が共有している古代末期の宇宙観、集団的表象の世界にまず目を向ける(100)。キリスト教化とは、まずもつてこの集団的表象、イメージのキリスト教化であつたというのである。古代人にとつて天とは空虚な空間ではなく、さまざまな霊的存在に満たされた場であつた。伝統的な神々を奉ずる人々は、この広大な空間を細かく分け、それぞれの部分に応じた神を配置するのに対し、アウグスティヌスやエジプト修道士のシェヌーテなどのキリスト教徒は、それらの部分全てを貫通する宗教的コモンセンスを創出しようと試みるのである。

キリスト教なコモンセンスの創出は、しかし、なかなか進展しなかつた。支配エリートはまさに統治している事実を表現する象徴を用いるというクリフォード・ギアツの理論に従えば、古代末期の支配階層はキリスト教とはまったく関係のない象徴を用いて自らの支配を表現していた(101)。ローマ帝国は四世紀において回復の時代を迎え、東西で華麗な宮中儀礼が発展し、元老院議員は豪華な床モザイクのある邸宅に居住していたが、それらはいずれもキリスト教とは関係のない伝統に由来するものだった。三五四年に作られたカレンダーはキリスト教徒貴族のヴァレンティ

ヌスのためのものであったが、彼は共和政時代と同じローマの時間に従って生きていたのである(512)。東方の首都コンスタンティノーブルでは戦車競争が華やかに開催されていたし、四四〇年代のラヴェンナの宮廷では信仰深いカトリックの宮廷人たちが新年の祝典で古式通りに惑星に扮して踊っていた。これらは四世紀において、キリスト教徒も非キリスト教徒も共有していた公的文化の諸相を明らかにするものである。

「異」教徒とキリスト教徒は、相互の忌避感情によって棲み分けていた。アウグステイヌスのところにもたらされた相談には、「異」教徒の刈り取った穀物を食べてよいが、風呂をいっしょに入るとよいかというもの多くあったが、これは双方がお互いにケガレを感じて距離を置いて生活していたことを示している。プラウンは、「宗教的偏見の解消が、常に宗教的寛容をもたらすものとなるとはかぎらないということを銘記しておくのは重要である」(513)と皮肉なコメントを与えているが、このすぐあとに共存と棲み分けの時代に終わりが近づいてくるのである。

西方では、こうした状況への嫌悪と危機感が教会人の間から少しずつ醸し出されてくる。上述のラヴェンナ宮廷の

新年の祝賀の様子は、ペトルス・クリュソログス司教が嫌悪感をもって書き残しているのであるが(514)、それはケガレのためでなく、キリスト教のなかに入り込んでいる異質な要素を発見しようとする、新しい感性の芽生えなのであった。教会では、このころ「キリスト教の衰退」ということが問題となっていた。公認以後、「異」教徒がなだれをうってキリスト教に改宗する反面、キリスト教側は迫害時代ほどの信仰に対する熱意を失ってしまったのではないかと問題である。

こうした危機感は、ゲルマン人の侵入で不穏な情勢となつた五世紀初頭の政治情勢にもうながされた、キリスト教化した地方エリートの地域支配強化という現実的要請にも促されて加速することになる。

このような情勢に應えて、キリスト教側からの明確な解答を与えたのがアウグステイヌスであった。フランソワ・ドルボーによってアウグステイヌスのものであると最近同定された史料によると、彼はカルタゴ司教区の教区民に対して、通夜の宴会や歌や踊りを「異」教的なものとして退けたばかりか、キリスト教殉教聖人と結合した祝祭であるからと許可を求めてきた伝統的な教会信徒の訴えをも退け

たのである。彼はさらに暦の名前も廃止し、単に一月、二月と呼ぶべきと推奨し、これに対してブラウンは「これでは厳密な意味でキリスト教化した国はポルトガルだけになるであろう」と評している (p. 23)。

ドナティストは「異」教徒の儀式を忌み嫌ったが、その儀式に接近しないだけで、それを積極的に破壊しようとはではしなかったのに対し、アウグスティヌスは全てをキリスト教的価値観で統合すべきと感じたのである。ブラウンによれば、このときアウグスティヌスは、「カトリックの厳格なモラルの水が溜まっていたダムを決壊させ、町全体にあふれさせた」のである (p. 23)。ブラウンは、このような彼の態度に、近代西欧人の理解可能なキリスト教的感性の誕生を見出している。

続く第2章 'The Limits of Intolerance' は、古代末期におけるキリスト教サイドからの迫害と不寛容の問題をあつかうもので、本書の中でもっともオリジナリティのある章となっている。ブラウンは、本章において、ステレオタイプ化したキリスト教対「異」教という二項対立の図式を乗り越えようとし、宗教とは別の当時の上層市民の共有する教養文化、パイディアの社会的意義を強調し、これに帝

国の財政政策を加えて全面的衝突を回避させる要因として考察している。

彼は本章冒頭では幼い甥の動物園での体験を描写する。甥は全ての動物は凶鑑でみると同じ大きさなので、どれも彼の飼ひ猫と同じであると思ひ込んでいたのだが、象や虎を見てショックを受けたというのである (p. 23)。これは、これまでのステレオタイプ化した叙述に対する批判であり、キリスト教による他宗教迫害と不寛容がまるで象のように大きなものとして描かれ、この時代は宗教対立に本質がある時代であるかのようなイメージに固まっているとえているのである。わが国ではコンスタンティヌス以後のキリスト教による非キリスト教徒への迫害と弾圧はまだよく知られていないが、欧米では啓蒙主義時代以来、教会の不寛容を示す好例として多くの歴史家によって取り上げられてきた経緯がこの批判の背景にはある。ただし、ブラウンはキリスト教擁護に後戻りしようとするのではない。教会史家もまた啓蒙史家と同じ史料を用いて教会の「勝利」を叫んできた歴史があり、そのどちらからも離れて、その当時のより広い文化的コイネーのなかに事態を置いて考えてみようとするのである。

彼は一九八〇年代までの多くの研究者はコンスタンティヌス帝からテオドシウス一世帝に至る帝国法令や教会教父の文言、それに哲学者の反応などに片寄りすぎているとし、日常の慣習に再度目を向けることの重要性をうったえるのである。古代末期の法令は現代の目からすると異様に厳格で不寛容に思われるが、それがじつさいに適用されるに際しては、それまでの長く確立した統治技法によるところが多かったというのである。すなわち、帝国行政は近代の官僚制とは異なつて、地方エリートネットワークに依存し、彼らの自発的な忠誠心、すなわち devotio によつて維持されてきたという (p. 66)。また、突然の強制や脅迫でなく、宗教を問わず上層市民になるに際して薫陶を義務づけられた、共通のバイディアによつて磨かれた作法によつて政治は運営されるべきものとされていた。この財政と文化的ふるまいの双方が宗教的不寛容の激発を阻止する要因として作用していたというのである。

たとえば、四〇〇年にガザのポルフュリオスが皇帝アルカディウスに「異」教神殿破壊の許可を求めてきたとき、皇帝は「私はその町に偶像があふれていることを知っているが、しかし同市は税金を払うことで devotio (忠誠心)

を示している。また、同市は国庫に多くの寄与も行っている。もし我々がこれらの人々を脅迫したら、彼らは逃げ去つて、我々は重大な損失を被ることになる」(p. 67) と伝えたといい。また、本書評冒頭でも紹介したアンテリオキアの「異」教文化人リバナニオスは、最後の「異」教皇帝ユリアヌスのもとで重用されたが、彼はシリア総督アレクサンドロスがキリスト教徒参事会員を手ひどく扱わないようにたしなめている。これを「暴力の時代における人間的寛容の精神のオアシス」と称揚する研究者もいるが、ブラウンはそれを批判して、リバナニオスにとってはキリスト教徒かそうでないかよりも、アレクサンドロスのような粗野で無教養なふるまいをする者のほうが我慢ならなかったのだと解釈している (p. 68)。同じような事例はキリスト教サイドでも見受けられ、修道士ヒュパティオスがカルケドンの町でオリンピック競技が行われているのを見て咎めたところ、同市の主教が現れて、「お前はだれもお前が殉教者になるのを望んでもいないというのに、死ぬ覚悟ができたというのだな。お前は修道士だ。行って庵で座り、黙って修行しておれ。これはわしの仕事じゃ」と語つたという (p. 69)。リバナニオスはユダヤ司祭のガマリエルと親交があり、こ

れも従来は圧迫された少数者同士の友情と解釈されたが、当時のユダヤ教は帝政初期とはかなり変化を遂げたものがあり、リバニオスは彼と共通の古典作品について往復書簡で語り合っていたのであり、つまりはこれも宗教ではなく、バイデアの共有により結ばれた事例ということになるとされている (p. 51)。

それでは、本書評冒頭で紹介したような修道士による暴力はどう解釈すべきなのだろうか。ブラウンは、それについて、リバニオスが皇帝に向けて書き送ることができたことが重要であると解釈する。修道士の暴力は「拒否できる暴力」(p. 51)であったというのである。一方、圧倒的な力があつたはずのオリエンス道長官の神殿破壊の執行については、彼は批判せずに沈黙している。修道士たちは、本来支配階層の独占すべき暴力を私的に行使したので、リバニオスは皇帝の法を冒すものであると感じ、そのように非難したのである。ブラウンは、地中海世界の多くの地方で神殿や神像が破壊されずに後世に伝えられたところにごとて、多数の地方エリートを選択が沈黙のうちに示されていると考えている。それらはいったん清められると「美術品」として大切にあつかわれた。マリナというあるキリスト教婦

人のところには、こうした神像が沢山コレクションとして集められ、「オリュンポスの神々もキリスト教徒となつて、ここで静かに暮らしているので、地獄の釜で溶かされるのを免れた」(p. 52)と言われたという。

ブラウンは、社会のキリスト教化はもつと深く静かに進行していたと考えているようで、元首政時代の人々が遺言状に「ローマの支配が続く限り」と書いていたのが、いつのまにか変化して、九世紀のアングロ・サクソン人は「洗礼の続く限り」と書くようになったことにその現われを読み取ろうとする (p. 53)。そして、そうした変化を地域社会の中で担ったのが初期修道聖人であつたと捉え、次章に移るのである。

第3章 'Arbiter of the Holy: the Christian Holy Men in Late Antiquity' は、ブラウンが一九七一年に *Journal of Roman Studies* 誌上に公にした論文 "The Rise and Function of the Holy Man in Late Antiquity" であつたシリアやエジプトのキリスト教修道聖人についての現在の彼自身の評価をまとめたものである。同論文はそれまで狭い教会史の伝統的枠内にとどめられていた古代末期の孤獨な禁欲修行者を主題とする聖人伝史料を、考古学や文化人

類学の幅広い知見から読み直し、彼らを抑圧的な古代末期社会からの逃亡者とする通説を退け、古代末期の成長する自立的村落社会の調停者として再評価したものであった。その衝撃力は大きく、さほど長くないこの論文の公刊二五周年を記念してシンポジウムとそれに基づく論文集が出版されたほどである。

彼のいうHoly Menとはキリスト教の聖人 Saints とほぼ同義であるが、後者が後世の教会認定を受けた聖人を連想させるのに対し、文字通り社会のなかで周囲の村人などの評判によって「聖なる人」と認められた人のことで、南北アメリカ大陸やアフリカの霊的指導者やイスラムのスーフィー、インドや中国の聖者とも比較しうる道筋を開いている。彼らはエジプトやシリアの砂漠で修行するうちに神に近い人として崇められるようになり、病癒しや予言などの奇跡を起こす。

ブラウンは、七一年当時はこうした意味での聖人を社会的なパトロンとして過度に評価してしまったが、それは彼らを賞賛する聖人伝作家の畧にはまったとして、現在ではそこまで確信は持てないという (p. 55)。本書執筆当時のブラウンの考えでは、彼らは社会的調停者ではなく、むしろ

信仰の促進者であり、交渉者であるという。つまり、「異」教禁止処置が出てから地域にキリスト教がじつさいに根付くまでの間のグレーゾーンを担う者であり、伝統的「異」教勢力に敗北を受け入れやすくする役割を担っていたのだという (p. 65)。

Holy Men は、当時の社会における聖性の頂点に立っていたが、その斜面は非常になだらかであったとブラウンは考える。たとえば、アウグステイヌスの母モニカはしばしば予知夢を見ていたが聖人とは呼ばれなかつたし、また現フランスのナントには、フリアルドゥスという農民がいて、彼だけが十字の形を作って蜂を追いかけることができた。また、人間でなくとも、教会のランプから取られた油はヒーリングの力を秘めていると信じられていた (p. 61)。

聖人とは、こうした聖性の場のなかで生み出されたものであった。シリアにおける代表的な聖人シユメオンは、柱頭聖人として知られ、四半世紀前に「異」教神殿が公式には閉じられたが、まだそれに変わるローカルなリーダーシップが成長していないところで出現した。彼は神殿の柱の上で祈り続けて人々の尊敬を勝ち得たのである。彼の修行場は記憶に残らないほど大昔からの聖域であり、ここで彼は

神々の降伏交渉を行い、ベドウインは彼の前で偶像を焼き、またレバノンの多神教のある村では彼の助言に従って十字を刻んだ石を置くことでネズミや人狼の害から逃れたという (p. 68)。

ブラウンによれば、こうした聖人は近代ヨーロッパの植民地伝道者と違って、全く異なった伝統に根ざした価値観を押し付けたのではなく、それまで存在していた霊的世界の伝統のなかで自らの優越性を確立していったのだという (p. 67)。しかし、その戦いは聖人伝作者が読者に信じさせようとして意図しているほど楽なものではなかった。たとえば、六世紀に地中海でペストと思われる疫病が流行したときには、人々は聖人に頼ってはばかりはいられなかった。「天使を装った悪魔」が以前信仰されていた青銅の偶像を拜むことを人々に助言したし、家から鉢を投げると病気にかからないで済むという噂が広まって、外を歩くと危険なほどになったという (p. 74)。

しかし、最終的にはキリスト教の聖人は、当時の社会変化に即応した新しいモデルを提供することによって勝利できた。五世紀なかばの早魃のとき、非キリスト教哲学者のプロクロスは太古からのやり方に従って雨を降らせたが、

そのとき彼の魂はアッティカの神々の一部となっていた (p. 75)。一方、イエルサレムの早魃のときに主教エウテュミオスも同じく雨乞いをしたが、それは天の神に哀れみを求める姿勢に終始した (p. 75)。

つまり、キリスト教の聖人は、ちょうどこの世の宮廷で皇帝に地方有力者が嘆願するように、天の宮廷で人々の罪に由来する罰を免除することを請い願う外交使節であり、一方人々に対してはそれらの罪を悔い改めさせる説教師であり、天界の秩序を地上において確立するものだったのである。こうして、聖シユメオンは人間界と自然界の境界にある柱の上から神の秩序を放散し、人間だけでなく、鹿、ライオン、蛇が現れてその命に従ったという (p. 76)。すなわち、聖人は単なる人間のバトロンのでなく、神に対して責任を負うものだったというのである。このような聖人の活躍によって、しばらくの間であるが、ヨーロッパから中東にかけての広大な地域がキリスト教化されたとブラウンは考えている (p. 78)。

さて、以上本書を通観しつつまとまらない筆を進めてきたが、挑発的で通説からの視点の変換を迫るブラウンのダイナミックな筆致は相変わらずである。その一端なりとも

伝えることが本書評の目的であるが、その目的が達成できなかったは大変心もとない限りである。いずれにしても、古代末期を多文化共存社会と捉え、宗教上の相違点よりも共通性を、宗教上の対立よりも教養や財政上の要求をより重要なファクターとして取り出すその視点には共感できる部分が少ない。現在の古代末期研究の多くは多文化並存を前提としているし、それはブラウンの本書をひとつの起点としている。また、本書において強調されたバイディアの価値も、宗教問題だけでなく、東西ヨーロッパやイスラム世界に古典文化が継承されていく過程を考える上で抜きにできない。

しかし、本書であつかわれた諸相はなお矛盾に満ちており、多くの課題を残すものでもある。ひとつには、キリスト教と非キリスト教が並存していたと言っても、ユリアヌスの短い統治を除いては、一人の例外もなく皇帝はキリスト教徒であったということ、国家祭儀もキリスト教徒が独占し、教会が成長する一方で、神殿は閉鎖されていたということ、やはり事実として認めなければならぬ。キリスト教徒による対「異」教迫害は、象ではないにせよ、ブラウン教授の甥の飼っていた猫でもなかったように思わ

れる。修道士の暴力が必ずしも上層市民に快く思われていなかったにせよ、多数の修道士がそれに参加する社会現象となっていたことも事実として確認しなければならない。

東ではヨハネス・クリュソストモス、西ではアウグスティヌスのような代表的神学者が大声で叫び続ける一方、それに対する反論は存在するとしても、少なくとも敗者の立場にしかなりえなくなっていく経緯も見逃ごせない。今日テロにうったえる少数の人々や、その撲滅を声高に叫ぶ人々の言動だけで世界を把握してはならず、より多数の人々の平和共存の諸相を深くみつめる必要があるにしても、そこから逆に現代の世界は平和共存が基調であると語ってしまうと奇妙な困惑を覚えるようなものであろうか。

とりわけ、第二章で社会的に影響力のない、少数の過激派のように扱われた修道士勢力と、第三章で「聖なる人」として称揚されている人々が重なっているところはどうか解釈すべきなのだろうか。第二章ではバイディアを通じて形成された上層市民の共通する社会通念の重要性が強調されつつ、第三章では彼らに蔑まれた修道士の聖人が社会全体のキリスト教化に与って力があると評価される。ブラウンは一九七一年当時より慎重に評価しているというが、彼らを

「調停者」から「促進者」もしくは「交渉者」に変更しても、その高い評価は基本的に変わらない。それどころか、聖人とは単なる人間のパトロンとしての地位にとどまらず、動物からナイル川まで、地上の全てに対して神に責任を負う者というのであれば、余計にその役割は高められているように見える。聖人伝史料はキリスト教サイドから聖人賞賛のために書かれた史料であり、これのみからキリスト教と非キリスト教との関係を描いてしまうことには、にわかには賛同しかねるものも感じてしまうむきも多いであろう。

また、彼らが安全な非難対象であったとするなら、そうでない暴力の担い手、すなわち、国家によるそれが本書では暗示されつつも、そのまま不問に付されてその後触れられないところも気になるのである。財政政策上、強硬な手段を控えた場合もあったにせよ、逆に財政政策上とくに配慮する必要があるければ遠慮なく破壊と収奪は行われただろう。最近の考古学的調査では、古代末期における都市の復興を確認しつつも、そこに都市景観の明らかな相違を認めている。市壁ラインは維持されているが神殿や公共浴場などは放棄され、代わって教会が大きな位置を占めていく。都市における教会の発展は、地方における修道院

の発展とも連動している³⁾。

キリスト教の教会は、それまでの個別の各都市や地域に根ざした宗教と違って、人類の居住する世界全て、少なくとも帝国支配の及ぶ範囲をひとつの信徒共同体として構想できるモデルを提供できた。その結果、一方では国家と、一方では地域社会とも手を結ぶことが可能となった。それまでは個人や個別の都市の規模でその場限りで行われていた貧民救済事業などの公共事業も、教会は組織的、継続的に行うようになった⁴⁾。考古学の提供する変化はこのような経緯を物理的に例示しているのかもしれない。しかし、そのことは非キリスト教勢力にとつては、個別の局面において紆余曲折はあるにせよ、次第に表舞台から退場させられていった過程であったことも忘れてはならないだろう。

彼らはその後どうなつていったのだろうか。ローカルな勢力のキリスト教化はただ単純に「正統」信仰をそのままに受容するだけでは終わらない。彼らは必ず自分たちなりの形で信仰を再解釈し、大きな外部世界に対応しようとしただろう。今後見定めなければならないのは、そのような部分であると思われる。

- (1) たしとては、次のようにある。"The Rise and Function of the Holy Man in Late Antiquity" *JRS* 61, 1971; *The Making of Late Antiquity*, Cambridge, 1978; "A Dark Age Crisis: Aspects of Iconoclastic Controversy" *HER* 88, 1973; *The Cult of the Saints: Its Rise and Function in Latin Christianity*, Chicago, 1981; *Society and Holy in Late Antiquity*, Berkeley/LA, 1982.
- (2) Howard-Johnston, J. and P. A. Hayward (eds.), *The Cult of the Saints in Late Antiquity and the Early Middle Ages*, Oxford, 1999.
- (3) Hall, Linda J., *Roman Beirut: Beirut in Late Antiquity*, London/NY, 2004, pp. 35-37.
- (4) 大月康弘「帝国と慈善…ピザンツ」創文社、2005年、第一部「帝国教会の財産形成」23—93頁を参照のこと。

〔付記〕 本稿は二〇〇五年十一月十九日、青山学院大学にて開催された西洋史研究会大会における報告「キリスト教『の』迫害』に基づくものである。